20035

EVT 前後における動脈触知スケールの院内標準化とその効果

[1]医療法人社団誠馨会　新東京病院、[2]医療法人社団誠馨会　新東京病院

渡辺　朋美[1]、古梶　有紀[1]、湯浅　雪[1]、成川　一二美[1]、朴澤　耕治[2]

【背景】当院の 2015 年の総カテーテル件数は 7028 件、うち EVT538 件、PCI/CAG 合計は 5947 件である。看護師間の EVT 前後の足血流の評価は今まで定性的に行われてきた。当院は BK 症例の EVT も多く、EVT 前後の足血流の変化を申し送りとしてどのように行うかが課題であった。【目的】スケールを用いて半定量的に行う事で、看護師間の申し送りが簡便なものとなるか、また病棟での足血流観察に有用かどうか調査する。【方法】従来あるスケールとしてチアノーゼ、浮腫等は存在しているものの動脈触知のスケールはなかった。そこで、当院医師が 2011 年よりカルテ記載していた独自の動脈触知評価をカテーテル室で導入し、院内統一スケールとするよう働きかけた。【結果】以前は病棟出棟時、マーキングが明らかに動脈の存在しない場所にされていたこともあったが、100%ではないが正確な位置にされるようになり看護師教育にもつながった。申し送り時だけでなく、カルテ記載もあり変化として捉えやすくなった。以上より半定量的な足血流の評価は有用であると考えられる。しかし、境界部分の解釈の違いがあるため誤差を少なくするような工夫が課題である。また、院内スケールとして標準化は第一段階であり今後はフォローアップ時の開存度調査を行い、病棟での退院指導ツールとしてつなげる。